



市民のまなざしをつくるのが「社協」(高島氏) 当事者の目線を持ち続けてほしい(鈴木氏)

◆今後の県社協の役割、
これからの県社協への期待とは？◆

三澤 研究大会への関わりはもちろん、今後の福祉人材について、行政と結びつき、取り組みを広めるため、県社協に継続して携わっていただきたいと思います。

和田 大きく期待することは、権利擁護の視点をもった人材育成のバックアップと、災害時の支援体制です。特に東日本大震災を契機に、社協が災害にどう対処していくのか、非常に重要な課題です。

昨年の震災時、市社協は市の災害対策部門と連絡すらとれない現実がありました。まず、自分のところをきちんと機能させる、それを県内すべての社協でやっていかないといけない。いざというときに機能を失う可能性を踏まえた上で、災害時の社協の役割を定めてい

なければ、要援護者・障害のある方・高齢の方々を支援していかれない。県社協には、勉強会や情報交換の場をつくってほしいです。

鈴木 行政や社協の役割が市町村レベルに移行する中で、県社協は県の方を向くのではなく、市民

のスタンスを徹底してほしい。

特に神奈川は団体の意識づくり、組織づくりがうまくいっていない。今日的な課題にはネットワークとか連携が必要だけれども、それが具体的にないといけないわけです。情報は多いけれど、その情報が十分に整理されていない。そこに県社協の役割があるのではないかと。個人と個人の連携を、地域の中でどう構築していくのか。その方法を、県社協でプロジェクトをつくって検討してほしい。

そして原点はぶれないことが大切です。先駆的にやってきた、ともしび運動を原点に、当事者に沿った目線をしっかり持って、個人を大切にすることを理念にしてほしい。

高島 県社協がいろいろなことを進めていくには、役員や職員が大事な要素になってきます。私は社協という場で、役員も職員も夢と希望を持って働いてほしいと思います。それがなければ組織は生き生きとしません。

しかし、県社協職員は元気がなくなってきたように思いますね。災害にも臨機応変に対応でき、夢と希望を一緒に考えていける、皆で体を張って「やろうぜ」みたいな、そういうタフな感じであってほしいです。

白井 社協とは、地域の福祉関係者がつくった協議体です。特に神奈川では、早い時期から当事者やボランティアの声に応えた貴重な活動の歴史があり、それが現在、さまざま



まな仕事を担える最大の要因だと思います。

今後県社協がネットワークや専門性を持つためには、地域にどのような営みがあるのか、とどき顔を合わせて情報交換していかなくてはいいけない。それがなくては三澤さんや和田さんの思いに込められない。これから大事にしなければいけないことです。

小さな地域は特に、ノウハウを残すことが難しい。県社協は今回の災害対応も含め、苦勞した点をどこまで継承できるか、将来に上げる取り組みをしておく必要があるでしょう。鈴木さんの「原点をぶらさない」という点でも、継続して社会福祉に携わる組織として、何かを残していく必要があると思います。

社会福祉は今、「自律した個人を前提にした福祉」へと変わってきています。しかし現実には、個人が必ずしも自律できていない。自律した個人を前提に、原点がぶれないよう意識しながら、その旗振りを県社協にお願いしたい。福祉的な価値の発信は、社協の最大の仕事であると思います。そこで夢と希望を先につなげてほしいと強く思います。

(企画調整・情報提供担当)